

發し、威嚇して目的を選せんとするものであつて、全く協同精神を没却したものであるといはねばなりません。これでは圓滑に解決の付かざる筈がないのであります。而もかくの如き行為は實際には決して従業員諸君多数の意思ではないのであつて、要するに評議會と之に附和する少数の従業員諸君の意思の表はれであるのです。其證據には作業を中止して集會するのは會社の發意であること、誤解して居たと申し居ます。私共は會社従業員諸君の大部分は着實健康なるを確信致します。今回のストライキは従業員諸君の本来の自由意思に立脚せるものではなくて煽動壓迫威嚇によるものなるは幾多の事實が之を證明して居る。

そこで今回の争議は之を實質的に云へば會社對評議會の争議であつて、會社對従業員のではないのです。之を一言で分り易く云へば會社従業員の名を藉りて評議會が會社を喧嘩を賣つて居るワケなのです。分析して問題を研究して見ると一、會社對従業員二、會社對評議會三、評議會對従業員の三の關係があるのであります。會社の主張は評議會の介入は絶対に排斥するのですから、會社對評議會の關係は絶対に認めないわけですが、従業員との關係を付けて横車を押し、喧嘩を賣つてくるのだからどうにもならないのであります。そこで會社は従業員諸君に對して評議會との關係を名實共に絶縁してもらはなくてはならぬ。そうすれば従業員對評議會の關係がなくなるから、そうすれば會社は素より會社對評議會の關係は一切認め居ないのだから、残る所は従業員對會社との關係で、此關係に於てすれば何事も順調に解決する筈で従業員諸君の爲めにもなるのだから是非さうするやうにと懇々と最後まで度々勸告する所があつたのであります。處が評議會の連中は社長は従業員を奴隷と心得て居るから、評議會が付いて居なければ、會社は再び従業員を撲つたり蹴つたりするに違ひないと申し居る様ですが、馬鹿げて御話になりません。社長が従業員諸君を奴隷扱にする人が、日本樂器は従業員諸君を踏んだり蹴つたりして来たか、衆目の常に知悉して居る所と存じます。彼等が宣傳と嘘とをはき違へて居る様な出處をいつても知る人ぞ知るです。評議會と全然分離した。善玉でも悪玉でも兎に角後援者が居なくなつたからといつて、直様従業員をいぢめるやうな、そんな非武士的なことが出来ませんか。十萬の市民諸氏が監視して居られます。日本の道徳神が容れません。人間といふものは多くの場合自分の根性で人の心を付度し易いものですからね。口に自由解放を稱へながら、他人をだましたりいぢめたり常に他人を利用すること斗しつけて居ると、外の人達が皆さうした悪人に見えるらしいですよ。兎に角です問題は頗る簡單です。従業員諸君が名實共に評議會と絶縁して、直接にして純粹な従業員對會社の關係となつて欲しい強い希望を持つて居るのです、そして水入らずで相談をしようではないかといふのであります。

然らば何故會社は日本労働組合評議會を認めないのか、此點に付いては充分皆さんの誤解ない様に願ひ度いのであります。私共は労働組合其者を認めないのではありません。組合を不必要といふのではありません。共通の立場にある労働者諸君が自分等の幸福の爲めに——私慾の爲めではありません。其幸福増進の爲めに、組合を組織されることは現代に於ては尠く必要であると思ひます。西洋の唯物思想の權現

制組織を以て、暴力的多數を築結して、争闘に依つて決するものであります。日本精神の美點である協力の精神を排斥するものである以上は之亦私相反するのであります。

如此理由で會社は評議會を極力排斥するのうにかかくの如き評議會と名實共に手を切つて、もらい度いといふことです。之は當に會社従業員みならず濱松の土地の幸福だと思ふのであります。會社は他の土地からやつて来たあの怖るべき産業發展の爲めに排斥します。主義の爲めに評議會の様な人達の濱松侵入を御免蒙り度いと思ひ、君は邪道に誘惑され、土地の平安和樂は攪亂さひ切つた決心は自己の利益の爲めではありませばこそ苦心して居る次第であります。惡例を殘せん。あの人は幾多の事例を見ましても、どう思切つた事もあるでせう。乍ら正道の爲めには公共の爲めには絶大なる犠牲も素より微笑を以せん。社長始め一同はこゝに悲憤な決心をして居敬愛する我濱松市民諸氏よ!! 眞正なる御批判望する次第であります。

争議團の名を以て今迄随分出處目な宣傳があつた點を一應列挙してみます。

1 社長は軍隊警察の發動を意の盡にしてみ偽を流布して居ます。必然之も平靜に宣傳であつて、一方市民殊に労働者諸君感念を注入し、一方軍隊並に警察の靈威策戦に外ならないことが判ります。社長の持合せはない筈です。常識を以て考

2 社長は要求ノ項目ハ成程妥當デアルと前進した所で既に明白な様に、會社として従業員諸君に全部拒絶したのではな拒絶するとか拒絶しないとかいふ所まで例を一つ擧げてみませう。甲が乙に僕の尻一つをくれと申込みました。ところが甲の樂者だといふ噂の高い、丙といふ友達と評議会で乙は甲に對つて、兎に角君の息子は絶交してもらはなければ、縁談の相談をやあないか早速何とかし給へ夫が本人の爲ねと申しました。二三日経つて甲は乙を誘り乍ら、先日御注意に基いてどういふ息から、どうだ一つ君の娘の婿に是非もらつへとやつて居ると、隣の座敷では甲の息子大亂痴氣を演じて居る最中で、乙が夫を知の様子は何だ、人を馬鹿にしちやあいけな